

## 永遠のいのちを持つために

ヨハネの福音書 3章 9-15節

### はじめに

今日は「ヨハネの福音書」からお話します。今日の聖書箇所は、「ニコデモ」という人とイエス様の対話の一部が書かれています。ニコデモは、10節にあるように、「**イスラエルの教師**」でした。また1節を見ると、「**パリサイ人の一人**」でもあり、「**ユダヤ人の議員**」でもありました。「パリサイ人」というのは、旧約聖書の律法と先祖たちの言い伝えを厳格に守る律法主義者でした。その中でも彼は「教師」でしたから、彼は旧約聖書の律法と先祖たちの言い伝えを人々に教える立場にありました。また彼は、「ユダヤ人の議員」でもありました。ユダヤ人は「サンヘドリン」と呼ばれる議会を持っていて、そこでユダヤ人の宗教と政治を扱いました。その議会の議員は70人いて、ニコデモはその一人だったようです。イエス様とのこれまでの対話を見ると、彼はおそらく老人であったと想像できます（ヨハネ3:4）。

### 1. ニコデモの信仰

そんな彼が、ある夜にイエス様のもとに訪ねて来てこう言うのです。「**先生。私たちは、あなたが神のもとから来られた教師であることを知っています。神がともにおられなければ、あなたがなさっているこのようなしるしは、だれも行うことができません**」(ヨハネ3:2)。

なぜ彼は、夜にイエス様のもとに訪ねて来たのでしょうか。二つの可能性があります。一つは、人々の目を避けるためです。ヨハネ12:42-43には、こういう言葉が書かれています。「**議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちを気にして、告白しなかった。彼らは、神からの栄誉よりも、人からの栄誉を愛したのである**」。当時イエス様は、ユダヤ教の異端児であり、神を冒瀆する者と考えられていました。ですから議員である者がイエス様を信じた場合、ユダヤ教から追放される可能性があったのです。ですからニコデモも、人々の目を避けて、夜にイエス様のもとに訪ねて来たのかもしれない。

もう一つは、イエス様から真剣に学ぶためです。夜というのは、人々が学ぶ時間でもありました。人々は、昼間は労働し、夜は学んだのです。ニコデモは、イエス様を「神のもとから来られた教師」であると考えて、イエス様を「先生」と呼びます。なぜイエス様をそのように考えたかということ、彼がイエス様の「しるし」、つまり「奇跡」を見たからです。彼は、イエス様の奇跡を見て、この人には「神が共にいる」「神のもとから来られた教師」だと考えたのです。彼は、イエス様の奇跡を見て、イエス様を信じたのです。

しかし2章の終わりを見ると、「**イエスご自身は、彼らに自分をお任せにならなかった…イエ**

スは、人のうちに何があるかを知っておられたのである」(2:24-25)とありました。イエス様は、ご自分の奇跡を見て信じる人々を信頼しなかったのです。ニコデモも、イエス様の奇跡を見て、イエス様を信じた人でした。その意味でイエス様は、ニコデモのことも信頼しなかったのではないのでしょうか。

イエス様は、ニコデモに向かってこう言われます。「人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」(ヨハネ 3:3)「人は、水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできません」(ヨハネ 3:5)。イエス様はニコデモに、今のままでは「神の国を見ることはできない」、「新しく生まれなければ」「水と御霊によって生まれなければ、神の国に入ることはできない」と言われるのです。言い換えれば、イエス様の奇跡を見るだけは、神の国に入れないと言われるのです。

「神の国」とは何でしょうか。それは、「天国」と言ってもよいかもしれませんが。今日の聖書箇所 15 節にあるように、「永遠のいのち」と言ってもよいかもしれませんが。さらに広く言えば、「救い」と言ってもよいかもしれませんが。「永遠のいのち」とは、不老不死のいのちではありません。今のままのいのちが永遠に続くとしたら、果たして私たちは幸せでしょうか。罪も悲しみも苦しみもないいのちが永遠に続くことこそが、私たちにとって幸せではないのでしょうか。新しいいのち、天国へと続く「永遠のいのち」こそが、私たちにとって幸せなのです。聖書では、「いのち」とは、神様と共に生きることを意味します。逆に、「死」とは、神様と離れて生きることを意味します。「永遠のいのち」とは、神様と共に生きるいのちを意味します。それは、イエス様を信じて新しく生まれた時から始まり、肉体の死を迎えても、なお途切れることのないいのちです。たとえ肉体の死を迎えても、私たちの魂は「天国」または「神の国」に迎え入れられ、そこで神様と共に生きるのです。そしてやがて世の終わり、最後の審判の時には、私たちの体は復活し、再び魂と結び合わされ、新しい天と新しい地で、つまり完成された「神の国」で、永遠に神様と神様を信じる人たちと永遠に生きるのです。これが、イエス様を信じる時に与えられる「永遠のいのち」です。

しかしニコデモは、9 節でこう言います。「どうして、そのようなことがあり得るのでしょうか」。ニコデモは、イエス様の言われることが分からないのです。どんなに律法を理解していても、どんなに年を重ねても、イエス様の言われることが理解できないのです。

イエス様は、11-12 節でこう言われます。「わたしたちは知っていることを話し、見たことを証しているのに、あなたがたはわたしたちを受け入れません。わたしはあなたがたに地上のことを話しましたが、あなたがたは信じません。それなら、天上のことを話して、どうして信じるでしょうか」。

ニコデモのように、イエス様の奇跡を見て信じる人は、イエス様が話すこと、イエス様の証しを受け入れることはできませんでした。神の国に入るためには、また新しく生まれるためには、イエス様の奇跡を信じるだけでなく、イエス様が話すこと、イエス様の証しを受け入れ、信じなくてはならないのです。

## 2. 人の子であるイエス

ではイエス様は、ニコデモに何を話し、証しされるのでしょうか。ニコデモは、イエス様の奇跡を信じる以外に、何を信じなければならないのでしょうか。13-14 節で、イエス様はこう言われます。「**だれも天に上った者はいません。しかし、天から下って来た者、人の子は別です。モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません**」。

イエス様はまず、天から下って来た方です。イエス様は、ご自分のことを「人の子」と呼ばれます。神でありながら、人となられた方であるので、ご自分のことを「人の子」と呼ばれます。そしてイエス様は、天に上られた方でもあります。イエス様は、天から下られた方であるので、「天上のこと」を話します。そして私たちの罪を償うために十字架で死なれ、三日目によみがえり、四十日後に天に上って行かれ、今は天におられる父なる神の右の座におられます。

ニコデモは、イエス様が「神のもとから来られた方」「神が共におられる方」だと信じていました。しかしニコデモにとって大切なことは、14 節のイエス様の言葉です。「**モーセが荒野で蛇を上げたように、人の子も上げられなければなりません**」。モーセが荒野で蛇を上げた出来事は、旧約聖書の民数記 21 章に書かれています。イスラエルの民は、エジプトの奴隷状態から解放されて荒野の旅を続けていた時、神様とモーセを非難してこう言ったのです。「**なぜ、あなたがたはわれわれをエジプトから連れ上って、この荒野で死なせようとするのか。パンもなく、水もない。われわれはこのみじめな食べ物に飽き飽きしている**」(民数記 21:5)。神様は、荒野の旅の途中、天からマナを降らせ、岩から水を出して、イスラエルの民を養って来られました。しかし彼らは、こんな生活に飽き飽きしたと言って、神様とモーセに不平不満を言ったのです。すると神様の怒りが燃え上がり、「燃える蛇」をイスラエルの民の中に送り込み、イスラエルの民にかみつかせたのです。その結果、多くの人々が死んだのです。彼らは、自分たちの罪を認めて、モーセに祈りを求めました。すると神様は、モーセにこう言われました。「**あなたは燃える蛇を作り、それを旗ざおの上に付けよ。かまれた者はみな、それを仰ぎ見れば生きる**」(民数記 21:8)。モーセは、「青銅の蛇」を作り、それを旗ざおの上に付けました。すると蛇にかまれた人々も、「青銅の蛇」を仰ぎ見て生きることができたのです。

イエス様はここで何を言おうとされたのでしょうか。一つは、ニコデモも私たちも皆、蛇にかまれたイスラエルの民と同じように、神様の怒りと呪いのもとにあるということです。そのため、ニコデモや私たちにも、仰ぎ見るべき「青銅の蛇」が必要であるということです。イエス様が言われたもう一つは、イエス様が「青銅の蛇」となるということです。イエス様も「青銅の蛇」のように、高く上げられて人々の公衆の面前にさらされるようになるということです。イエス様は、「人の子も上げられなければなりません」と言われました。これは、十字架の死を意味しています。十字の木を地上に立てられ、その上に釘で張り付けにされることを意味します。このイエス様の十字架の死を仰ぎ見る時に、私たちは、神様の怒りと呪いから救われるのです。私たちが仰ぎ見るべき十字架のイエス様の姿は、衣服を取られて裸にされ、全身殴られたあざがあり、頭に茨の冠をかぶらされ、両手両足に釘を打たれ血を流されたイエス様の姿です。この恥ずかしい、痛ましい、顔を背けたくなるような姿を、イエ

ス様は公衆の面前にさらされたのです。なぜでしょうか。それは、私たちが仰ぎ見て生きるようになるためです。仰ぎ見て神様の怒りと呪いから救われるためです。

私たちは、なぜこのような恥ずかしい、痛ましい、顔を背けたくなるようなイエス様の姿を仰ぎ見なければならぬのでしょうか。それは、私たちの罪がどれだけ恥ずかしく、痛ましく、顔を背けたくなるようなものであるかを知るためです。私たちの罪は、私たちがこれまで犯してきた心の中の思いや言葉や行いは、イエス様がこれほどまでに悲惨な姿にならなければ赦されないほど、神様の御前には大きく重大な罪なのです。十字架はきれいなものではありません。醜いものであり、見たくないものでもあります。しかし私たちは、見なければなりません。そこには、私たちの罪の醜さ、悲惨さが映し出されているからです。

### 3. 信じる者が永遠のいのちを持つ

なぜイエス様は、ご自分の奇跡を見て信じる人を信頼されなかったのでしょうか。なぜイエス様は、ニコデモを信頼せず、ニコデモに新しく生まれなければならないと言われたのでしょうか。それは、彼らがイエス様の十字架を仰ぎ見ていないからではないでしょうか。言い換えれば、自分の罪を見ていないからではないでしょうか。私たちは、自分の罪の問題を解決しない限り、神の国に入ることはできないのです。イエス様の奇跡を見て、イエス様を信じたいと思っても、永遠のいのちを得ることはできないのです。イエス様は私たちのありのままを愛してくれるから信じたいと思っても、神の国に入ることはできないのです。私たちは、イエス様の十字架を仰ぎ見て、自分の罪を見つめなければ救われないのです。罪の問題が未解決のまま、神様の怒りと呪いから救われることはできないのです。

罪とは何でしょうか。罪とは神様を愛さないこと、人を愛さないことです。つまり自分だけを愛して、自己中心に生きることです。自己中心の性質そのものが罪なのです。神様に背を向けて、自己中心な行動、自己中心な言葉、自己中心な心の中の考えが罪なのです。そこに、神様の怒りと呪いが向けられているのです。この罪は、イエス様の十字架以外に解決方法はありません。イエス様の十字架以外に、この罪が赦される方法はありません。イエス様の十字架以外に、私たちが新しく生まれる方法はありません。イエス様の十字架こそ、私たちが神様を愛し、人を愛する新しい生き方へと導いてくれるものです。

イエス様は 15 節で、こう言われます。「それは、信じる者がみな、人の子にあって永遠のいのちを持つためです」。私たちにできることは、一つしかありません。自分の罪とイエス様の十字架をしっかりと見つめて、イエス様を信じることです。私たちは、自分で自分の罪を解決することはできません。自分で自分の罪を償うこともできません。自分で神様の怒りと呪いから救われることもできません。私たちに、天から下られた人の子であるイエス様に、お任せすることしかできないのです。自分の罪の問題もこれからの新しい人生も、イエス様に信頼して、お任せして委ねることしかできないのです。その信仰が、私たちを新しく生まれさせるのです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、自分の罪も分からずに歩んできました。イエス様の十字架の悲惨さを仰ぎ見る時、自分の罪の重大さに初めて気づかされます。私たちの罪は、決して軽いものではありません。自分で償えるものでも、自分で解決できるものでもありません。私たちの自己中心の性質は、私たちにこびり付き剥がれないのです。どうか、イエス様の十字架によって私たちの罪の問題を解決してください。どうか私たちを新しく生まれさせ、神様を愛し、人を愛する新しい人生を歩ませてください。

私たちの罪の問題も、これからの人生もイエス様あなたにすべてをお任せします。どうかお導きください。この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。